

令和 3 年度 山形県地域協調型洋上風力発電研究・検討会議
第 1 回 酒田沿岸域検討部会 議事要旨

1 開会

2 挨拶

- ・山形県環境エネルギー一部鑑水次長より挨拶。

3 説明

(1) 酒田沿岸域検討部会の設置について

- ・事務局より資料 1-1 に基づき説明。

～部会長に三木委員が指名され、以降、三木部会長が座長～

(2) 酒田市沖の海域について

- ・事務局より資料 1-2 に基づき説明。

4 情報提供

(1) 洋上風力発電の現状と今後の展望

- ・資源エネルギー庁より資料 2①に基づき情報提供。
- ・一般社団法人 日本風力発電協会より資料 2②に基づき情報提供。

(2) 洋上風力発電と漁業協調方策

- ・一般社団法人 海洋産業研究・振興協会より資料 3 に基づき情報提供。

(3) 酒田市沖調査研究事業の概要について

- ・事務局より資料 4-1 に基づき説明。
- ・国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構より資料 4-2 に基づき情報提供。

5 説明・意見交換

(1) 洋上風力発電に係る動向等について

- ・事務局より資料 5-1 に基づき説明。

(2) 酒田部会の進め方について

- ・事務局より資料 5-2 に基づき説明。

(3) 意見交換

西村委員（山形県漁業協同組合）

漁業者の生業の場所である海に風車が建つことについて検討を進めるに当たっては、酒田地先で既に実施された漁業実態調査の内容について、その理解と認識を深めるにはどうするのか、どのような施策をもって漁業協調策等検討会議を設置するのかという点を明確にしてほしい。

また、酒田市沖における NEDO の調査研究事業については、当初説明が足りず漁業者

も混乱していたが、調査の際には漁場を空ける必要があるので、可能な限りスムーズな日程で調査を終えるようにしていただきたい。そのためにも、漁業者全体で協力していきたいと思っている。

漁業者の生活がかかっているので、県は漁業者の意見に真摯に耳を傾けていただき、これからの様々な会議を有意義なものにしていきたい。

高梨課長（事務局）

漁業者の生活の場でどこが共存可能かを研究・検討していく中で、漁業者の皆様の考えをしっかりと聞きながら進めていくことは大切なことである。今後 NEDO の事業として実施される漁業実態調査も、既にある酒田地先の漁業実態調査を理解・整理したうえで進めていただき、情報を皆で共有しながら、研究・検討を進めていくことが大事である。

長谷川委員（山形県北部小型船漁業組合）

県では新規漁業者のために様々な支援や助成を行っているが、洋上に風車が建った場合、共同漁業権漁場（海共第2号）内での漁業は難しくなると思う。新規の漁業者や後継者が全然出てこなくなると思うが、その点はどのように考えているか。

高梨課長（事務局）

洋上風力発電と漁業との共存共栄をしっかりと描き、そのためにどのようなことができるのか、検討・研究を行うことが何よりも大事だと考えている。

高橋課長補佐（県庄内総合支庁水産振興課）

洋上風力発電ありきということではなく、実際どういうことができるのかをよく検討して進めることが大事だと考えている。

阿部委員（酒田市自治会連合会）

先ほどの情報提供は、カーボンニュートラルや SDGs などが世界で話題となっている中、洋上風力発電について、素晴らしく夢のある内容であり驚いた。20～30 年後に向け、ぜひ実現していただきたい。

何点か質問だが、プレジャーボートを持っている友人から、酒田と飛島の間にある、国土交通省が設置している波高計の周りに魚が沢山いると聞いた。先ほどの情報提供の中でも、洋上風車に人工の魚礁が期待できるとあり素晴らしいと思ったが、漁業権との関係はどうか気になった。風車の近くにプレジャーボートが集まって釣りをしているのか。

また、風が強い海域では、過去に大きな貨物船が座礁する事故が何件かあったが、風車と貨物船が接触する心配はないのか。

また、酒田は白鳥の飛来地であるが、風車による白鳥の事故について、海外の事例

も含め教えていただきたい。

最後に、以前は庄内浜でシジミが沢山とれたが、今は全然とれないと聞く。それも増える可能性はあるのか。

中原委員（（一社）海洋産業研究・振興協会）

風車の基礎に魚が集まるかどうかはやってみないと分からない部分もあるが、少なくとも、何もなかった海中に構造物ができると魚影が集まってくるという事例はある。たとえば、波高計だけではなく、センサー付きのロープを一時的に海中に垂らしておいた場合などでも魚群が集まってきていることは、JAMSTEC（海洋開発研究機構）から画像データとして出されている。また、長崎県五島の浮体式洋上風力発電でも、周りに魚群が巻いていることが画像で確認されていると承知している。

なお、砂質の海底でのシジミについては、専門外であり知見がないので、水産試験場等、専門の研究所の方から私もぜひ教えてもらいたい。

斉藤委員（（一社）日本風力発電協会）

白鳥の質問について、酒田市沖に関しては現地に知見がなく分からないが、北海道の北部にも白鳥の飛来地で、かつ風の状況が非常に良く、風力発電の好適地と呼ばれるエリアがある。実際、そこには沢山の風車が設置されているが、当然のことながら事前に調査されたうえで、白鳥が飛来してくる場所や飛行ルートなどを極力回避した形で事業計画が練られ、実際に風力発電所として運転していると聞いている。

また、当協会として、会員事業者を対象に鳥の死骸の発見に関する調査をしたことが何度かあるが、その中では白鳥の死骸を発見した例はなかったと記憶している。

小林オブザーバー（資源エネルギー庁新エネルギー課風力政策室）

実際に風車が建った場合、どこまでプレジャーボート等が接近できるかという質問について、まず前提として、海域の占用許可は、基本的に長期間その場所に固定されるものを対象とするものであり、船の航行を制限するものではない。

ただ、風車の安全管理上、どこまで近づくことが可能か、離隔距離をどのくらいとるのかという議論は別途行うことになるが、これは事業者が選定された後に、選定事業者と関係者が協議をした上でどういったルールにするのかを決める話である。

そのため、法律によって船の航行が一律に制限される訳ではなく、地域としてどういうルールにするかということ、今後、関係者が協議の上で決めていくことになる。

矢野委員（酒田商工会議所）

洋上風力発電は、地元で非常にホットイシューとして色々な意見が飛び交っているところである。本部会の意義は、正しい情報を地元の青年経済人の間で共有することだと思う。洋上風力発電が好きか嫌いか、賛成か反対かの前に、きちんとした事実の整理と把握をし、地域住民として勉強していきたい。

過去に、大西洋やバスク地方等の風が強い地域に建っている洋上風車を船から見たことがあるが、その地域の人々はタラやカレイやイワガキを食べる習慣があり、非常に酒田と似ていると感じた。おいしい庄内の魚が食べられることを担保にしてほしいと一市民としては思うが、先ほどの情報提供の中で、風車の支柱にできる魚礁等、メリットがあることも学んだところである。

「風」は地球の資源であり、これを有効に活用し、我々青年経済人としても、地域の次の世代の子供たちのことを考えていかなければならないと思っている。今後、世界的に人口が爆発的に増え、2050年には90億人を突破して食糧難時代が来るともいわれており、ヨーロッパ諸国では難民の受け入れや食料確保のための木の伐採などの環境問題が生じていたり、国連はタンパク質を取るために昆虫食を推奨していたり、地球規模で持続可能なSDGs的バランスを模索している中、この地域においては「風」から生み出されるエネルギーを議論する段階に来ている。地域の次の世代の子供たちにきちんとした資源を受け継いでいきたいという意味で、洋上風力発電は必要性かつ可能性の非常に高い選択枝の一つだと考えており、これからも委員の皆さんと情報共有しながら、色々な意見を交わし、しっかり勉強していきたい。

信夫委員（酒田市地区自治会連合会）

今日は初めて聞くことばかりで戸惑っているところだが、遊佐町沖ではこうした部会を平成30年度から続けているとある。今回立ち上げたこの酒田部会は、今後、どのような形で協議がされていくのか、スケジュール的なものも含めて教えていただきたい。

高梨課長（事務局）

本部会の開催については、特に回数や期間を設けるわけではなく、並行して漁業協調策等を考え、情報を共有しながら、皆さんと一緒に研究・検討を重ねて参りたいと考えている。

山家委員（県エネルギー政策総合アドバイザー）

まず、酒田市沖での議論をスタートできたことについて、関係者の方々の理解に敬意を表したい。また、数年前より勉強を開始し、洋上風力発電の認識を深め、有望な区域に選定された遊佐町の関係者の方々にも、改めて感謝をしたい。

せっかくこれほどのメンバーが一堂に会しているので、忌憚のない議論をお願いしたい。同時に、カーボンニュートラルや地域情勢を見据えて、ある程度のスピード感も必要だと思っている。4～5年前からの遊佐町の議論や、隣県での議論も踏まえることができるので、どういう方向であれ、常に議論が前に進んでいくという緊張感を維持することが大事だと思っている。環境への影響、漁業協調、地域振興等、多くの論点があるが、バランスのいい議論が重要であり、どれか一つに偏ってはもったいない。

また、酒田市沖は政府のセントラル方式の実証事業に採択されているが、今後、酒

田市沖での議論が順調に進んだ場合、このセントラル方式が間に合うのかという見通しがなかなか難しい。いずれにしても、実際に事業を行う事業者の方との情報交換は非常に重要である。建設から運転、廃棄まで、30年間の地域との付き合いとなるので、事業者とどのように情報交換や意見交換をしていくかについても重要な検討課題だと認識している。

最後に、これだけのメンバーが集まって、勉強・議論し、地域で準備をするわけなので、政府には、地元の意向がしっかりと反映されるような評価システムの構築と、地元が納得できる評価をぜひお願いしたい。

三木座長（東北公益文科大学）

本日いただいた意見、或いは一部回答保留になった質問については、次回までに事務局で取りまとめと整理をお願いする。

以上で意見交換を終了し、進行を事務局にお返しする。

6 その他

7 閉会

[了]